

# 貴書に学び、稀書と遊ぶ —能楽師下田益三しも だ ます ぞう（明治後～昭和初） による書籍収集—

The book collection of Noh by Shimoda Masuzo (1887–1931)

米田真理

YONEDA Mari

経営学科

yoneda@alice.asahi-u.ac.jp

## 要旨

大阪のシテ方観世流能楽師・下田益三しも だ ます ぞう（明治20年 [1887]—昭和6年 [1931]）は、大正時代、能楽関係書籍の収集家として知られていた。

益三による書籍収集は、金銭で書物を買集めるだけでなく、自らが筆を執って古文書を忠実に写すというものだった。例えば、桃山時代末期の伝書で諸大名家に相伝された本願寺坊官しもつましやうしん・下間少進とう著『童舞抄どうぶしょう』は、大正10年、わんや書店社主で書籍収集家の江島伊兵衛所蔵の本を借り受け、模写したものである。

また、益三は江戸時代以前の謡本の研究に情熱を注いだ。光悦謡本は桃山時代末期に刊行され、雲母模様の紙や本阿弥光悦流の書体が美しく、美術品として珍重されている。益三は、自らも5冊を入手したほか、大正13年は、複製本「松竹梅光悦本」を作成、頒布した。

さらに、謡の地拍子をめぐり、当時の著名な研究者と議論をたたかわせることも、たびたびだった。益三は、大正時代の洒脱な気風の中で能楽と向き合った人物の一人といえよう。

## はじめに

大正時代から昭和初期は、能楽に対する学問的興味が急速に高まった時期であった。

大阪のシテ方観世流能楽師・下田益三しも だ ます ぞう（明治20年 [1887]—昭和6年 [1931]）は、橋岡久太郎はしおかきゆう たろうに師事し、大阪の橋岡家の会である淡交会たんこうかいを支える一方、能楽関係書籍の収集家としても知られていた。その方法は、単に書籍を金銭で買集めるだけではなく、他所のものを借りて精巧に筆写するというものだった。また、気に入った古書を忠実に複製し、淡交会を中心に頒布したこともあった。さらに、書籍の内容について深く研究を行い、

当時の著名な学者である山崎楽堂やまざきがくどうや高安六郎たかやすとも交流し、論戦を繰り広げている。

本稿では、現代では知る人の少なくなった益三の業績を通して、華やかな大正期の能楽界の一面を紹介したい。

なお、本文中、資料の引用にあたっては、仮名遣いは原文のままとし、漢字は新字体に改めるとともに、新たに濁点ならびに句読点を付した。

## 1. 下田家と淡交会

### ① 下田家略歴

下田益三の経歴ならびに下田家の歴史について

は、益三の妻・ひさが編んだ記録、ならびに益三の子息・雄三ゆうざうが残した『下田家記録』から知られる。

下田益三は、当時の大阪市西区薩摩堀南之町さつまぼりに生まれた。生年は明らかではないが、『下田家記録』で大正5年(1916)に30歳とあるのに従い、これを数え年とみて、明治20年(1887)生まれとしておく。なお、没年は昭和6年(1931)に44歳と記され、大正5年に30歳であることと齟齬が生じるが、これは満年齢と考えたい。

下田家は、江戸時代以来商売を営み、元禄年間には下田家は廻船問屋「鍋屋」を、分家の中田家は京橋(天満橋南詰東)で砂糖問屋「薩摩屋」を営んでいたという。

下田家初代が起こした「鍋屋」は、出雲方面へ運航し、米・砂糖などの運送を行っていた。また、運送の便のため薩摩堀と称する堀を造営した。

『図集 日本都市史』(高橋康夫ほか、東京大学出版会、平成5年)によれば、薩摩堀は道頓堀や長堀などとともに、江戸時代初期の元和から寛永年間にかけて集中的に開削された運河のひとつである。『大阪府の地名』(平凡社、昭和61年)「薩摩堀川」の項によれば、薩摩堀は大阪市西区に位置し、阿波堀川から岡崎橋の西で南に分流していた。開削の中心は薩摩屋仁兵衛で、寛永5年(1626)に着工、同7年に完成している。薩摩藩の国産品の荷揚げに用いられ、薩摩屋仁兵衛と鍋屋宗円が取り締まりに当たった。昭和26年(1951)、埋め立てられて姿を消し、その流域は現在、西本町3丁目から立売堀4～5丁目に含まれる。

『下田家記録』には、二代目のころは住友家や鴻池家に次ぐ富豪であったと記される。年賀の挨拶には、住友家に80人が訪れるとすれば、下田家には50人が来訪したという。

また、益三の祖父にあたる四代治兵衛の代に出された広告には、「雲州廻船問屋 兼 荷受問屋」「雲州・伯州・因州 風帆船荷物取扱所」「鳥取県下・嶋根県下 御諸君様方御定宿仕候」として、和船22隻、風帆船14隻を所有していたことが記されている。

ところが、その治兵衛の代の後半に災難が続き、まず、大暴風雨のため、船・積載物を一時に失ってしまった。さらに、土蔵の中へ女中が提灯を置き忘れたことから出火し、重要な物品が焼失した。このため下田家は商売を畳んだらしく、五代目益太郎は自営ではなく、野村商店(野村證券の前身)に勤務する会社員であった。

さて、益三の祖父治兵衛は、橋岡雅雪はしおかがせつに謡曲を習っていた。橋岡家は大阪の観世流の名家で、天保3年(1833)生まれの雅雪は、大阪の明治期能楽を中興した功労者と称された。この祖父の稽古に同行して雅雪のもとへ通っていたことが、後に益三が能楽師への道へ進む契機となった。

## ② 下田益三と淡交会

益三は橋岡雅雪の勧めで東京の橋岡久太郎きゅうたろうに師事し、能楽師を目指すことになった。その時期は明らかではないが、子息の雄三が編んだ『下田家記録』には、日清・日露戦争によって衰退した能楽が復興した頃のことと記されている。

久太郎は明治17年(1884)、高松市に生まれ、本名は乃村と言ったが15歳の時に大阪に出、親戚にあたる雅雪の後継者となった。明治34年に上京し、観世流23世宗家(家元)清廉きよかど入門して内弟子となり、7年後に独立している。

明治42年(1909)に雅雪が没した時には、益三は大阪で、遺された雅雪の妻・せいの世話を引き受けていた。また、公的にも、益三が大阪の淡交会を受け継ぎ、毎月、東京から久太郎が来阪の際には世話役をつとめていた。一門で宗右衛門町南の茶屋に出入りするほか、家でも引続き宴会が行われ、出費が多かった。また、家元の来阪時も、何かと世話をしていたようである。

ちなみに、観世宗家は明治44年(1911)に先代の清廉が没し、17歳の養嗣子清久が継承した。先代の家元の内弟子であった久太郎としては、この11歳下の新家元を支えようとしたし、益三もまた、久太郎の力になるよう努めたであろう。

益三と淡交会の親密な関わりを示すのが、大正10年(1921)、雅雪の十三回忌の記念品として制作、

配布された「和楽山謡曲寺絵図」である。これは、入門から習物ならいものに至るまでの謡曲の到達度を、寺院の参詣図になぞらえて描いたものである。この絵に添えられた解説「和楽山謡曲寺絵図略解」からは、次のような制作の背景を知ることができる。

- ・原図は雅雪所持の軸物で、律師榮秀書、良溪画、庭山耕園鑑定である。
- ・益三が絵巻物に作り直すべく、阪田作治郎（大阪の高麗橋にあった古美術商）の仲介で、庭山耕園に描き直してもらった。その際、縦に描かれたものを横向きに直すので、非常に苦心した。
- ・印刷や意匠などは阪田氏の尽力であった。

また、翌年配布された「再び和楽山謡曲寺について」には、原図の筆者や製作時期について、大阪の医師であり謡本の研究者でもあった高安六郎に考証を依頼したことが記されている。この人物については後にも触れるが、益三とは親交があり、書籍の貸し借りを行ったり、能楽論について意見をたたかわせる仲でもあった。

さて、益三は30歳の明治5年（1916）、東区東横堀筋違端東詰南入の舞台付きの家に引っ越し、活動の拠点とした。だが、翌年には東区淡路町に引っ越し、以後、没するまでの15年間に、判明するだけで8回の転居を繰り返す。この背景には、家主による改築や、あるいは病気療養のためといった様々な事情があったが、頻繁であることは間違いない。

- ・大正5（30歳） 東区東横堀筋違端東詰南入（現西区江戸堀付近）。舞台のある家。
- ・大正6（31歳） 東区内淡路町（現中央区内淡路町）。俳人の旧宅で、花の多い家。
- ・大正9（34歳） 東区内平野町（現中央区内平野町）。高い塀越しに松がのぞく家。
- ・大正10（35歳） 元の淡路町の家に戻る（家主による改築のため）。
- ・大正11（36歳） 北区網島（現都島区網島）。造幣局の川向かいの家。
- ・大正12（37歳） 北区絹笠町（現北区西天満付近）。
- ・大正13（38歳） 南区八幡町（現中央区西心斎

橋付近）。

- ・大正14（39歳） 東区広小路町（現中央区上町1丁目）。
- ・昭和2（41歳） 南区北桃谷町（現中央区安堂寺～谷町9丁目付近）。庭が広く大きな桐や山茶花のある家。

（以上、年齢は数え年）。

益三は大正13年ごろから、視力を失いつつあった。さらに、次第に体調が悪化し、昭和3年（1928）には、大阪大学病院へ3ヶ月間入院する。そして、3年後の昭和6年、44歳でこの世を去った。

なお、初めにも触れたように、益三の経歴に関する記録は、益三の妻・ひさによって書き残されている。ひさは、大阪の唐木屋（黒檀、紫檀など、輸入木材製品の商店）の出身で、日本画を上村松園に師事し、松契の号を有していた。益三とひさとの間には4人の子があったが、そのうち長男の雄三（初名義男）が、父益三の没後、橋岡久太郎に師事して能楽師となった。この雄三もまた書籍と学問を愛し、父の収集した書籍の価値を認め、詳細な目録を作成するとともに保存に努めたのである。

## 2. 伝書の書写

下田益三の能楽関係の蔵書は170点以上にも及ぶが、その中には、原本を借り受けて自ら書写したものが多く見られる。これらは、金銭で買い集められたコレクション以上に、益三の蔵書の特徴付けるものである。

以下、いくつかの例を挙げておきたい。

- ・『観家之花伝』。橋岡雅雪蔵。原本は寛永18年石田少左衛門の写本。
- ・『作物覚書』。親世宗家の蔵書で橋岡久太郎が借りていたものを、大正11年書写。
- ・『能面打略系』。鳥取藩主池田家旧蔵。大正8年、同家の能面700点が売却され、400点を橋岡淡交会が落札した際、書写。
- ・『謡伝書 附録 祝言小謡』。京都図書館蔵。
- ・『謡引歌 附和歌口伝書』。檜常之助蔵。

・『岩井・平岡・関 関寺小町批評』。高安六郎蔵書を大正12年書写。

上記のうち『能面打略系』は、能面鑑定家として著名な喜多七大夫古能の『仮面譜』(寛政9 [1797])とともに、2部ずつ書写されている。このうち1部は良質の紙を用いて装幀され、友人の古美術商・阪田作治郎に贈られた。この本は、昭和33年、作治郎から益三の子息・雄三に再び贈られている。

上記のほか、興味深い例としては、『童舞抄』<sup>どうぶしょう</sup>、『五音抄』<sup>ごおんしょう</sup>、『舞台抄』<sup>ぶたいしょう</sup>の写本が挙げられる。これらは、安土桃山時代から江戸初期に活躍した本願寺坊官で、能の名手であった下間少進<sup>しもつましゅうしん</sup>(1551～1616)の伝書である。これらの伝書は、少進から伊達政宗や秋田実季といった戦国大名に相伝され、また、江戸初期には刊行もされたことから、比較的多くの諸本が残されている。だが、益三の写本は、少進の後裔である京都の下間家に代々伝わった本を書写したという点で、貴重である。

益三の写本の識語には次のように、益三が伊兵衛から伝書を借り受けて書写した事情が記されている。

『童舞抄』三冊、『五音抄』一冊、『舞台抄』一冊、合せて五冊、帙入なり。東京江島伊兵衛氏の所蔵大正十一年正月東上の折、橋岡先生より以て江島氏より借受け写之。先年、高安六郎博士、西本願寺入札の折、此書出でありしも、高価ならんかために控へしは残念なりしとの話を聞き、日頃より見たしとの念願なりしに今此書を写畢を得しは、日頃の本懐を達したりし満足にたえず。但し、内容は予の想像よりは面白くもなし。下間氏は本願寺の家人なりしとかいふ。

大正十一年三月廿八日

写畢 下田益三

これによれば、大正10年(1921)に西本願寺にて売り立てがあり、高安六郎氏は入手できず、江島伊兵衛が落札した。江島伊兵衛は、宝生流謡本の版元であるわんや書店の店主であり、稀代の書籍収集家として著名である。その本を橋岡久太郎

のついで益三が翌年1月に借り受け、2ヶ月間ほどで書写したのである。書写し終えたことを「本懐を達したりし」と表現するところに、益三の書籍収集に対する姿勢が表れている。

ところで、江島伊兵衛のコレクションは、現在、野上記念法政大学能楽研究所内にあ

る、鴻山文庫の所蔵となっている。鴻山文庫蔵の下間家伝来本については、能楽資料集成『下間少進集I』(西野春雄校訂、わんや書店、昭和48年)の解説(西野春雄)によれば、少進自筆本が下間家を離れ、江島伊兵衛の所蔵となったのは戦後のこととされている。これは、大正10年に入札があったとする益三の記述と食い違う。

じっさい、益三が書写した『舞台抄』の絵図は、『下間少進集I』所載の影印と比較すると、下間家旧蔵本『舞台之図』ではなく、版本『舞台抄』のものに近い。だが、現在、鴻山文庫には少進自筆本以外の、下間家伝来本は収められていない。すると、益三が書写したのはどのような本かという疑問が生じる。

ただ、これらのことは、益三の姿勢を窺う上では問題にはならないだろう。益三が書写した『舞台抄』は、原本に「近い」というより、むしろ、説明書きの文章の文字・字体を含め、かなり忠実な模写となっている。こうした書画の才能と、何より自らの情熱と根気をもって、益三は書架に貴重書を並べることができたのである。

### 3. 「光悦謡本」に関する研究

下田益三の蔵書の中で注目されるのは、江戸時代に刊行された「光悦本」と称される貴重書と、益三によって制作された複製本の存在である。

光悦本とは、江戸時代のごく初期、慶長10年

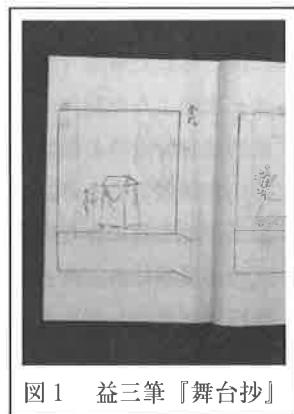


図1 益三筆『舞台抄』

(1605)前後に刊行された観世流の謡本である。本阿弥光悦流の書体で本文が記され、料紙に雲母模様がほどこされた華麗な本で、美術史の分野でも重視されている。

こうした美麗書は、財閥を中心とする美術品のコレクションの中に加えられることが多かった。同時に研究も盛んとなり、大正6年には和田維四郎による、本阿弥光悦関係の美術品全般を扱った『嵯峨本考』が刊行されている。また、大正11年ごろからは大阪の医師・高安六郎が精力的に研究を行っている。六郎は益三と親交があり、盛んに意見の交換がなされた(なお、六郎の一連の研究は、昭和16年刊行の『光悦の謡本』にまとめられている)。

下田益三は各種の光悦本のうち、「色替わり特製本」《安達原》と「上製本」《鶴》《柏崎》《殺生石》《春栄》の計4冊(うち《春栄》を除く3冊が現存)、「並本」《当麻》《藤戸》《二人静》《千手》《邯鄲》の計5冊(うち《邯鄲》を除く4冊が現存)所持していた。「色替わり特製本」および「上製本」は当時の価格で《安達原》1冊が10円、あとの4冊は計80円だったことが、益三の子息・雄三による目録に記されている。

さて、光悦本を珍重する気風の中、これを模した謡本を制作する人々が現れた。『鴻山文庫本の研究(謡本の部)』(表章、わんや書店、昭和40年)によれば、明治末から大正年間に6種の模本が作られている。だが、中には技術的に粗雑であったり、販売目的であったが採算が合わずに刊行が中断したりするなど、成功したとは言えない例もあった<sup>1)</sup>。それに比べ、益三が大正13年に制作した本は、光悦特製本の忠実な複製となり、制作者の目的が達成されているという点で特徴的である。

益三の本は、大正10年(1921)に東京の精藝社から刊行された複製本に依っている。これは、光悦関係本の頒布会として作られた嵯峨本刊行会に

おける第一弾の企画として出されたもので、当初は100冊の刊行が予定されていた。ところが、大正10年に《高砂》《白楽天》《矢卓鳴》《老松》《難波》《邯鄲》が刊行されただけで、絶えてしまった。

そこで益三は、この中から《高砂》《老松》の版を使用し、新たに《東北》(古名《軒端》)を加えた3冊の複製を、「松竹梅光悦本」と称して100部制作したのである。この3冊が選ばれたのは、これらが江戸幕府の正月行事であった「謡い初め」で謡われたものであることに因んでいる。

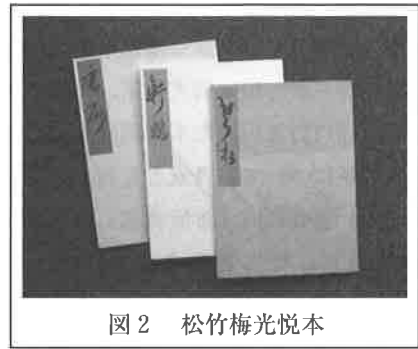


図2 松竹梅光悦本

この間の事情は益三が謡本に添えた「松竹梅光悦本に就て」に詳しく、100部制作したものの関東大震災で過半数が焼失し、45部しか残らなかったことが知られる。また、精藝社の複製は岩崎家のモリソン文庫蔵本に基づいており、益三の複製本制作にあたって新たに借り出した《軒端》が、やはり関東大震災で焼失したという(よって、現在、東洋文庫が所持している旧モリソン文庫本は99冊である)。なお、益三は精藝社複製本6冊を所持しており、うち《高砂》《白楽天》《難波》が現存している。

益三は、複製本について次のように述べる。

此松竹梅光悦本作成は僅少の部数では有りましたが、恐らく近き将来に於て刊行せらるゝことはありますまい。幸に好機を得て、たゞに三冊を以て然も光悦本の芸術味に親み得るに充分であるとの自覚を有する本書を得たことをひそかに本懐とするので有ります。

(「松竹梅光悦本に就て」)

ここからは、益三が光悦本の芸術性に魅せられ、忠実な複製を目指したことが知られるとともに、

<sup>1)</sup> 明治43年、観世流改訂刊行会による《高砂》の複製は、無地藍色表紙の袋綴という粗末な装幀だった。また、大正4年、観世流改訂刊行会による《芭蕉》の複製は、全百番複製を企画のうえ予約募集されたが、応募が少なく以後の発行が見合わせられている。

益三の数寄人としての一面が窺われる。

#### 4. 地拍子の研究

益三は収集した能楽の伝書をもとに、能の型や謡について熱心に考証を行った。その中で謡のリズムに関する理論である「地拍子」研究は、当時の著名な研究者とともに能楽愛好者向け雑誌を舞台に論戦が繰り返された。

地拍子論はすでに江戸期以来の謡伝書に見られ、益三も『謡曲手引 八拍子』(全3冊、皇都書肆刊、文化2年[1805])や、『謡曲地拍子研究の栞 宝生流』(中島賢三著、川崎利吉訂正、わんや書店、明治44年[1911])といった本を所有している。

この地拍子について集大成とも言える論考を発表したのが、能楽に関する研究者、評論家、さらには建築家としても著名な山崎楽堂(明治18[1885]—昭和19[1944])だった。楽堂は紀州藩士の家に生まれ、東京帝国大学建築学科を卒業後、法政大学教授や東京音楽学校講師などを歴任した。能楽に関して、観る側・習う側の大家として活躍した人物である。その楽堂が著した大正4年(1915)刊『謡曲地拍子精義』(江島謡曲書肆)は、観世・宝生・喜多の三流を対照した稽古用参考書として好評を博し、以後も版を重ねることになった。

益三はこれに対し、雑誌『大観世』12年3月号に「誤まれたる地拍子原理」を掲載、その後も「山崎楽堂への反論」などの反対意見を次々と発表した。その背景には、橋岡家に伝わる拍子の理論と、自らが丹念に行った謡曲の分析とが存在した。これらは一編の論としてまとめる用意があったらしく、草稿が残されている。

こうした益三の地拍子論は生前に刊行されることはなかったが、子息の雄三によってまとめられ、橋岡慈観(久太郎の子息・能楽師)の序文を添えて『地拍子体様用の研究』として刊行されている。

#### おわりに

下田益三が能楽師として活動した明治末期から大正時代は、能楽の近代化が急激に進んだ時期だった。

素人弟子の急増を背景に家元の利権をめぐる問題が相次ぎ、観世流内における家元と梅若家の対立が起こった。また、謡本の発行権をめぐり、新組織である観世流改定謡本刊行会と、旧来の版元である檜書店とが裁判で争った(明治40年)。

一方、細川侯爵邸など華族の私邸に能舞台が次々と作られ、こうした富裕層による能面や能装束のコレクションが行われた。『能楽』『大観世』『謡曲界』など能楽関係の雑誌が発行され、研究や評論が誌面を賑わせた。

書籍についても、江戸時代以前の能楽伝書や謡本が古典籍として脚光を浴び、収集や研究が盛んに行われるようになっていた。益三が大正10年(1921)4月に自らの覚えとして作成した書籍目録『大正拾年四月起之 能楽書目控』には、

未だ自分の手に入ざるもの、見ざる物のみたきもの、手に入たきもの、見たもの、入りたる物は、肩に\のシルシを付ける  
と記され、書籍に思いをはせていた様子が窺われる。

だが、益三は昭和6年(1931)、44歳の若さでこの世を去った。師匠でもあり、年齢の近い同志でもあった橋岡久太郎が昭和半ばに観世流家元を補佐し、一時は芸事顧問を務めるなどの活躍を見せたことに照らせば、もし益三がもっと長生きしていたら、さらに多くの書籍に巡り会うことができただろう。そう考えると、その逝去はあまりにも早く、惜しまれる。

貴書に学び、稀書と遊んだ能楽師、下田益三の活躍期は、華やかに過ぎ去った大正という時代とそのまま重なっている。同時に、その活動も、この時代の能楽を大いに反映しているといえよう。

参考文献

- 西野春雄・羽田利「能・狂言事典」(平凡社、昭和62年)  
 西野春雄校訂「下間少進集 Ⅰ」(わんや書店、昭和48年)  
 表章「鴻山文庫本の研究(謡本の部)」(わんや書店、昭和40年)

謝辞

本稿を成すにあたり、貴重なお話を伺い、資料閲覧の機会を賜りました下田ゆき子様、ならびに共同研究者としてお力添えいただきました筑館一様、阪口泰子様、三苫佳子様、心より感謝申し上げます。

なお、本稿は平成23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「東海地方における地域密着型の能楽興行に関する研究」(研究代表者・朝日大学経営学部米田真理、課題番号22520206)の成果の一部となります。

表1 下田益三・橋岡久太郎年表

年(西暦) 益三年齢(数え年)	下田益三	橋岡久太郎	その他
明治17(1884)		橋岡久太郎(本姓乃村)生。	
明治20(1887)1歳	下田益三生。		
明治32(1889)13歳		橋岡雅雪の芸事後継者となる。	
明治38(1905)以後 19歳～	(日露戦争後の復興期)雅雪の勤めで久太郎に師事。		
明治40(1907)21歳			丸岡桂の観世流改訂本刊行会設立、翌年刊行開始。謡本をめぐる版權争議盛んに。
明治41(1908)22歳		久太郎、独立。	
明治42(1909)23歳		橋岡雅雪没(80歳)。久太郎26歳。	
明治44(1911)25歳			観世清庵没。17歳の養嗣子清久、宗家継承。梅若家による免状問題表面化。
大正5(1916)30歳	大阪市東区横堀筋遠東詰南入へ転居。舞台がある家。		和田維四郎「嵯峨本考」刊。
大正6(1917)31歳	東区淡路町2丁目へ転居。		
大正7(1918)32歳	長男義男(雄三)生。		細川侯爵邸舞台開き。以後、華族邸の舞台開設続く。
大正9(1920)34歳	東区内平野町2丁目へ転居。		
大正10(1921)35歳	もとの淡路町の家へ戻る。		この頃から山崎楽堂による地拍子関係書刊行盛ん。
	橋岡雅雪十三回忌記念「和楽山謡曲寺絵図」作成。	橋岡雅雪十三回忌。	
大正11(1922)36歳	北区網島へ転居。造幣局川向かい。		この頃、高安六郎による光悦本研究盛ん。
	父・益太郎(野村商店・後の野村證券勤務)没。		
	「再び和楽山謡曲寺について」執筆。		
大正12(1923)37歳	北区衣笠町へ転居。		
	雑誌「大観世」に、論文「誤られたる地拍子原理」山崎楽堂への反論掲載。		
大正13(1924)38歳	この頃から次第に視力を失う。		
	光悦本複製「松竹梅光悦本」作成。		
	南区八幡町へ転居。		
大正14(1925)39歳	東区広小路町へ転居。		
		雅雪の妻・氏浦せい没。	
昭和2(1927)41歳	南区北桃谷町へ転居。		
昭和3(1928)42歳	大阪大学病院へ3ヶ月入院。		
昭和6(1931)(44歳)	没。		
昭和14(1939)	下田義男、上京し橋岡久太郎の内弟子となる。		
		幼少の観世元正を補佐。一時期、芸事顧問を勤める。	観世左近(前の清久)没。10歳の養嗣子元正、宗家継承。
昭和16(1941)			高安六郎「光悦の謡本」刊行。